

6 3 6 1 - 9 4 6
平成18年12月26日

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成18年度病虫害発生予報第9号について

平成18年度病虫害発生予報第9号を発表したので送付します。

平成18年度病虫害発生予報第9号

向こう1か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
施設果菜類	病害一般	—	2
	タバココナジラミ類	やや多	2
冬春キュウリ	べと病	やや多	2
	うどんこ病	並	3
	褐斑病	並	3
	灰色かび病	やや多	3
	菌核病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや多	3
冬春ピーマン	斑点病	並	4
	うどんこ病 ※	多	4
	菌核病	やや多	4
	ミナミキイロアザミウマ ※	多	4
	黒枯病（仮称）	—	5
冬春トマト	葉かび病	やや多	5
	灰色かび病	多	5
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）	—	5
	タバココナジラミ類	やや多	5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	6
	アブラムシ類	やや多	6
	ハダニ類 ※	多	6

※病虫害発生予察注意報を発表

○ 12月中旬の冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

○ 1月の気象予報

平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年より高い、降水量は平年並みか多い、日照時間は平年並か少ないと予想されている。

（1か月予報 鹿児島地方气象台12月22日発表）

○ 発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1 病害一般

長期予報によると天候は周期的に変わり冬型の気候は長続きしない、気温は平年より高いと予想されることから、状況によっては加温機が稼働しないこともあるので、気温の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスサイドや内ホロを多重被覆するなど様々な対策が取り組まれているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意する。

キュウリ：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病（仮称）など

2 タバココナジラミ類（バイオタイプQ、シルバーリーフコナジラミ）（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 冬春キュウリでの発生面積率31.6%（平年21.2%）は平年より多、百葉当たり虫数1.0頭（平年6.0頭）は平年並である。
- 2) 冬春トマトでの発生面積率41.7%（平年23.0%）、百葉当たり虫数4.4頭（平年4.0頭）はいずれも平年よりやや多である。
- 3) 冬春ピーマンでの発生面積率7.7%（前年15.4%、前々年27.3%）、百葉当たり虫数0.15頭（前年0.30頭、前々年0.80頭）で、前年よりやや少ない。
- 4) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は平年より高いと予想され本虫の増殖に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) タバココナジラミ バイオタイプQとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- 2) どちらも多発するとスス病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。また、トマトでは黄化葉巻病（TYLCV）を媒介するので特に注意を要するが、最近、一部の地域でタバココナジラミ類に起因すると推測される黄化葉症（メロン、キュウリ）が発生した事例もあるので、ウリ科作物での発生にも注意が必要である。
- 3) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 4) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガード乳剤等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。
- 5) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段も利用する。

冬春キュウリ

1 べと病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率63.1%（平年58.9%）、発病葉率7.3%（平年11.6%）はいずれも平年並である。

- 2) 向う1ヶ月の長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い、降水量は平年並または多い、日照時間は平年並または少ないと予想され、本病の発生に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 湿度が高いときには多発しやすく、多発すると防除が困難となるので予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。
2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥培管理に注意する。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率47.4% (平年35.4%) は平年よりやや多、発病葉率4.0% (平年4.1%) は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
2) 耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率31.6% (平年34.0%)、発病葉率2.4% (平年4.2%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。
3) 下葉の発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率5.3% (平年8.5%) は平年並、発病葉率0.5% (平年0.4%) は平年よりやや多である。

- 2) 向う1ヶ月の長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い、降水量は平年並または多いと予想され、本病の発生に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。
2) 発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 菌核病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率10.5% (平年12.5%)、発病果率0.2% (平年1.1%) はいずれも平年並である。

- 2) 向う1ヶ月の長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い、降水量は平年並または多いと予想され、本病の発生に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

6 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率10.5% (平年4.9%)、葉当たり虫数0.2頭 (平年0.1頭) はいずれも平年よりやや多である。

2) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は高いと予想され、本虫の増殖に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

1) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

冬春ピーマン

1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

1) 12月中旬の発生面積率23.1% (平年35.3%)、発病葉率0.5% (平年3.2%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

1) 多湿条件では発生した場合の被害も大きくなるので、除湿に努める。
2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (多)

※平成18年度病害虫発生予察注意報第9号(12月22日発表)参照

[予報の根拠]

1) 12月中旬の発生面積率84.6% (平年41.9%)、発病葉率13.7% (平年4.4%) はいずれも平年より多である。

2) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は平年より高いと予想され、本病の発生に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
2) 本病菌は組織内部に侵入して繁殖し、他の作物のうどんこ病のように白粉をふりかけたようにはならないので、葉裏を中心に観察し早期発見に努める。
3) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。
4) 上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、1回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、1週間間隔で2回以上の防除を実施する。
5) 微生物農薬のダクト散布等では、治療的な防除効果は期待できないので、多発時には必ず液剤散布*を実施する。

*液剤散布：水和剤や乳剤など水で希釈して散布する方法の総称(農薬概説より)

3 菌核病 (やや多)

[予報の根拠]

1) 12月中旬の発生面積率7.7% (平年3.8%) はやや多である。

2) 向う1ヶ月の長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い、降水量は平年並または多いと予想され、本病の発生に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

1) 地表面の菌核からの胞子の飛散を防ぎ、ハウス内の湿度を下げるためにビニルマルチを行う。

4 ミナミキイロアザミウマ (多)

※平成18年度病害虫発生予察注意報第9号(12月22日発表)参照

[予報の根拠]

1) 12月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率77.0% (平年43.3%) 10花当り寄生虫数3.6頭 (平年1.9頭) はいずれも平年より多である。

2) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は平年より高いと予想され、本虫の増殖に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) ミナミキイロアザミウマでは10花当りの寄生虫数が1頭から被害果が出始める。多発してからでは防除効果が低くなるので、密度増加時には薬剤散布後に発生（孵化、羽化）する幼虫・成虫に対しての追い打ち防除が必要である。
- 2) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、異なる系統の薬剤のローテーション散布に努める。
- 3) 被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチの導入（本虫の土中や地表面での蛹化を防止）により密度低下をはかる。

5 黒枯病（仮称）

[防除上の注意]

- 1) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- 2) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。

冬春トマト

1 葉かび病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率8.3%（平年3.5%）、発病葉率0.3%（平年0.4%）はいずれも平年よりやや多である。
- 2) 向う1ヶ月の長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い、降水量は平年並または多いと予想され、本病の発生に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2 灰色かび病（多）

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率25.0%（平年0.9%）は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 日中の換気、夜間の保温を行い、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花卉の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3 トマト黄化葉巻病（TYLCV）（-）

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類（媒介虫）の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

4 タバココナジラミ類（シバ^シ-リー^リコナジ^コラミ^ラ、カ^カコナジ^コラミ^ライ^イタイ^イQ）（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率41.7%（平年23.0%）、百葉当り虫数4.4頭（平年4.0頭）はいずれも平年よりやや多である。
- 2) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は平年より高いと予想され本虫の増殖に好

適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に寄生しているので、かけムラのないように丁寧に薬剤散布を行う。
- 2) 施設内には黄色粘着板（100枚以上／10a）を設置し、密度の低下をはかるとともに粘着板に誘殺が確認された場合には、すぐに殺虫剤の散布を行い徹底的に駆除する。
- 3) その他、「施設果菜類」（2ページ）の項参照。

冬春イチゴ

1 うどんこ病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬のイチゴ葉での発生面積率58.4%（平成30.6%）、発病葉率9.1%（平成3.1%）はいずれも平成より多である。
- 2) イチゴ果実での発生面積8.3%（平成12.0%）、発病果率0.3%（平成1.0%）はいずれも平成並である

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2 アブラムシ類（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率33.3%（平成20.1%）平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

3 ハダニ類（多）

※平成18年度病害虫発生予察注意報第10号（12月22日発表）参照

[予報の根拠]

- 1) 12月中旬の発生面積率58.3%（平成38.4%）、寄生株率25.3%（平成7.4%）、葉当たり虫数7.8頭（平成1.4頭）いずれも平成より多である。
- 2) 向う1ヶ月の長期予報によると、気温は平成より高いと予想され本虫の増殖に好適な条件になると考えられる。

[防除上の注意]

- 1) 収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

○ 農薬散布時のドリフト対策について

- 1 ポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬の使用については今まで以上に厳重な注意を払うことが必要です。
- 2 風の弱いときに、ノズルや散布方向、噴霧圧力などに注意して、適正な農薬散布を心がけましょう。
- 3 地域でよく話し合い、農薬の使用時期や農産物の栽培内容などを十分調整しましょう。
- 4 農薬の散布について疑問点がありましたら、病害虫防除・肥料検査センターもしくは最寄りの農業改良普及センターへお問い合わせください。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分

多	い	（高	い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多	い	（やや高	い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少	ない	（やや低	い）	平年並の外側20%の度数の入る幅
少	ない	（低	い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
 - 1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
 - 2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - 3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - 4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
 - 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 櫛間
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo
@pref.miyazaki.lg.jp